

「教養日本力」高度化推進プログラム 台湾調査報告

訪問先	台湾大学日本語文学系（校史館）
調査日時	2007年11月22日 10:00-12:00
調査対象者	台湾大学日本語文学系 趙順文教授、黄鈺涵助理教授、服部美貴講師
訪問目的	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「教養日本力」高度化推進プログラム主旨説明</li> <li>2. 訪問校における関連事項に関するインタビュー</li> <li>3. 授業見学（日本語授業）</li> <li>4. 訪問校から本プログラムに対する要望の確認</li> </ol>
調査方法	独自に作成した項目に従ったインタビュー、写真・録音記録
調査結果	<p>*当該校におけるコース概要および開講科目についての詳細は別添資料を参照のこと</p> <p><b>【コース概要】</b></p> <p>同コースは、1994年に台湾の国立大学初の日本語学科として、文學院外国語文学系より独立した。教育目標としては次の点が上げられている。1) 日本語能力と国際観を備えたバランスのよい人材の育成、2) 日本語学／日本語教育学分野、および日本文学／文化の研究と国際交流の促進である。将来的に語学、文学系の研究専門職を希望する学生は主専攻に重点をおくが、それ以外のものに対しては、副専攻やダブル・ディグリーの選択を奨励する、いわば語学プラスαの指導をしている。</p> <p>現在同コースに所属する教員は13名おり、専門は言語学および文学が大半である。</p> <p><b>【入学選抜方法等】</b></p> <p>大学への入学選抜法は以下の3のとおりである。1) 大学統一試験（50名）、2) 推薦入学（3名）、3) 申請入学（3名）。*（）内は定員数。また、外部からの編入試験制度もあり、1学年の生徒数は大体50名前後とのことである。なお、統一試験の場合の受験教科は、英、数、総合科目（歴史、地理等）とされている。</p> <p><b>【開講科目について】</b></p> <p>科目名等については別添の資料に詳しいが、カリキュラムは語学、文学、翻訳、歴史文化等の専門課程を中心に組み立てられており、言語に関しては4技能プラス1として、読む、書く、聞く、話す能力以外に翻訳・通訳の技能</p>

の育成にも力を入れている。また、将来中等教育機関での日本語教育に従事することを希望する学生には、教職課程が設置されており、卒業後半年間の教育実習も義務づけられている。

授業は講義形式が主である。また、客員教授を招いての集中講義も年間十数回実施されている。

日本文化に関する講義で近年特色のあるものとしては、「中日文化」という科目におけるサブカルチャー関連の講義等があげられた。なお、学生が日本語、日本文化を学ぶ理由としては、アニメやゲーム、日本のテレビ番組等の人気等が最も多く、また、同校が実施している親近感を感じる国に関するアンケートでは日本が第1位にあげられたとのことであった。

#### 【学部の国際化に関する問題】

同大学全体では現在受け入れている留学生の出身国は主に韓国、日本である。留学生の専攻分野は中国語学、文学等が多いが、理系分野では東南アジアからの留学生もいる。

国際戦略のビジョンとしては、国際的な協定校数の拡大と留学生の積極的受け入れ方針をとっており、そのことは同校の近年の世界ランキング上昇につながっているものと思われる。

日本および諸外国の大学との提携の有無とその具体例としては、UMAP への参加（現理事長は台湾大学長）、御茶ノ水大学との国際プロジェクトなど（日、韓、英等と国際会議：毎年学生も発表）があげられる。日本における提携校としては、現在東大、東京外語大、早稲田、慶応、御茶ノ水等がある。

同コースにおいては、週に3～4回「ジャパニーズコーナー」を日本人留学生に謝礼を払い、昼休みに実施、留学生と学部生の交流を促進している。自由参加であるが、参加する学生は少なくない。

また学部生の1/3が在学中に交換留学を経験しており、5年で卒業することが多い。

なお、語学に関しては専攻の日本語のみならず英語の習得にも力を入れることを奨励している。

#### 【コース運営にかかる問題・努力】

日本語に関してはクラス編成の問題があげられた。同校の日本語文学系が開講している日本語科目は、同コースの学生を対象としたクラスの他に自由選択科目としての日本語（主に初級から中級レベル）があるが、特に自由選択科目としての日本語は大変人気が高く、年間2,200名あまりの履修者がいるため、一クラスの人数が多くなっている。現在40名前後で行っ

ている授業の定員を将来的には20名前後とすることが目標とされている。また、大学全体の方針として、IT機器の効果的使用が奨励されており、PPT等を効果的に使用することが教員にも求められている。

学生の授業選択の動機としては、応用性の高い科目が選択される傾向にある。(例：翻訳・通訳等)

日本語科目に関しては全クラスにTAを採用しており、web上で授業の進行情況、各週の講義内容等が確認できるシステムも整備されている。TAには日本への留学経験のあるものを優先的に採用している。

#### 【教員について】

教員の採用にはまず専門分野が問われる。また、最低条件として博士の学位が要求される。現在教員の質的向上に向けたプログラムは特に設けられておらず、各員の個人的努力によるところが大きい。

#### 【卒業生の進路について】

日系企業への就職とともに海外の大学院に進学するものも多い。卒業後日本に留学するものは多い年では学部学生50名中10数名にのぼることもあり、主に同校と提携のある大学の大学院を選択する学生が多い。また、成績優秀者は3年で卒業する制度もあり、4年次に修士課程に試験なしで学内進学することも可能である。なお、同コースの修士課程の定員は年間10名とされており、内部進学をするものは留学するものとは比べ少ない。

#### 【その他】

近年の同国の行政改革により大学運営にも変化が見られる。同大学では民間からの寄付金も募っており、近年は20億円の寄付金を集め、新校舎(情報工学)を建設した。また、卒業生や日本企業など(三井物産、三菱、丸紅、全日空、外語会(台湾人と日本人が半々)からの寄付金も寄せられている。

#### 【まとめ】

以上、台湾大学の日本語文学系においては、日本語のみならずその他の専門も身につけたバランスのよい人材の育成に重点がおかれていた。在学中および卒業後に留学する学生も多く、国際的感化を身につけた人材が育成されているといえよう。また、国際化のシステムの構築も推進されており、そのことが世界的にも評価されているようである。

また、台湾では街中に日本のものが溢れており、インターネット等の普及も手早い、いわばサブカルチャーの分野では日本にいるのと変わらない速

	<p>度で情報を入手することができる。そのため、日本語および日本文化を学ぶ学生の学習動機としてはアニメ、ゲーム等と並び日本のテレビ番組や音楽等の流行もあげられているが、そこを出発点として、その後如何に日本語および日本の歴史文化をバランスよく学ぶかということが同コースの課題であり目標とされることであることがうかがえた。</p> <p>なお、東京外国語大学に対する要望としては、今後も台湾大の学生の受け入れを継続すること、コーパス、e-learning システムの強化等があげられた。</p>
備考	<p><b>【受け渡し資料】</b></p> <p>(外大→台湾大)：本プログラムパンフレット、OFIAS パンフレット、「2008 年度大学院入学案内」各 1 部</p> <p>(台湾大→外大)：「国立台湾大学日本語文学系書簡介」1 部、「台湾大学における日本語教育と大学院教育」台湾大学日本語文学系講師 服部美貴 1 部、「2006 年度 台湾における日本語教育事情調査報告書」1 部</p>

調査担当者： 外国語学 岡田昭人